Japanese Journal of Applied Psychology
2002, Vol.28. No.1, 75-76

追　悼

高橋たまき先生の在りし日を偲んで

日本女子大学名誉教授・日本応用心理学会名誉会員　宮本　美沙子

高橋たまき先生は，癌により本年4月11日に，幽明境を異にして遠くに旅立たれました。享年71歳でいらっしゃいました。

3年ほど前から先生は入退院を繰り返しておられました。けれども，3月下旬に開催の日本発達心理学会の大会には，高橋先生ご自身の企画によるシンポジウムに出演の予定と伺い，あゝお元気になられたらしい，また大会会場でお目にかかれるのだ，と安堵とともに再会を楽しみにしておりました。

ところが，そのシンポジウム当日に欠席なさいました。おやおや，またご健康が思わしくなくなられたのかしら，と案じておりましたところ，それから何日も経ない4月11日に先生の訃報が届いたのです。私は思わず「え！たまき先生が？」と絶句してしまいました。こんなにアッサリ他界してしまわれるとは，と痛恨の極みでございます。

高橋先生は，1954年に慶応義塾大学文学部心理学科をご卒業，同大学院社会科学研究科を1959年に満期退学され，1964年に同大学より文学博士の学位を取得されました。

1962年より，先生は日本女子大学の児童研究所研究員として発達心理学の研究・実践を進展させ，76年より一般教育課程助教授，82年より教授として心理学を担当されました。その後，1987年から1年間アメリカのイエール大学に行かれ，遊びの実証的研究を手がけておられるシンガー教授夫妻のもとで，高橋先生のライフワークとなる遊びの心理学につき研鑽を積まれました。1990年には，日本女子大学に新設の人間社会学部心理学科教授に移籍，学年進行と共に設置の大学院の修士課程，博士課程の大学院生の指導にも尽力されました。その間に学科主任，大学院の専攻主任などを歴任，定年退職時に名誉教授となられました。ご退任後は，帝京平成大学情報学部福祉情報学科教授としてご活躍でした。

先生は，非常勤としては，慶応義塾，上智，茨城，青山学院，白百合女子，大阪，白梅学園短大，放送大学など多くの大学で講義をされ，国立特殊教育総合研究所，最高裁判所書記官研修所の短期研修講師としても活躍されました。

先生の初期のご研究は，学習心理学の視点から動物を手がかりとして学習のメカニズムを探ることを課題にされ，要求水準におけるコンフリクトに関する内容で学位論文をまとめられました。その後これらの知見を人間の子どもに適応させ，人間の初期の学習経験に展開させ，先生のライフワークとなる幼児の遊びの場面を通して心理的メカニズムを明らかにする発達研究の方向に進まれたのです。

その成果は学術論文，学会発表，シンポジウム，講演などで発表され多くの貢献をされました。関連の論文や著書などは大変たくさんありますが，誌面の都合もあり論文の紹介は割愛し，遊びに関するご著書の2～3を挙げますと，次のようなものがございます。

・『乳幼児の遊び；その発達のプロセス』
　（単著，1984年，新曜社）
・『想像と現実；子どものふり遊びの世界』
　（単著，1989年，ブレーン出版社）
・『遊びの発達学・基礎編』『遊びの発達学・展開編』
　（共編，1996年，培風館）

これらはいずれも高く評価されており，遊びの心理を学ぶ多くの学徒に読まれております。また，遊びに限定せず，心理学あるいは発達全体に視野を広げた編著あるいは共著のものも多く，その中には例えば次のようなものがございます。

・『基礎と臨床の心理学 Ⅰ：初期経験と初期行動』
　（共編著，1977年，誠信書房）

・『発達の諸理論』（共編著，1982 年，芸林書房）
・『教育心理学エッセンス』
（編著，1986 年，八千代出版）

これらのものも多くの研究者に刺激を与え，先駆となる内容によりその後の発達研究に示唆を与えるものとなっておりました。

さらに先生は学会活動に大変積極的に参画され，尽力しておられました。本誌は応用心理学会の機関誌ですので，まず，応用心理学会でのご活躍を中心に紹介させていただきます。（応用心理学会への貢献につきましては，荻野七重事務局長より情報をいただきました。）

・常任運営委員/常任理事　1980 年11月～
・事務局長　1993 年 4 月～ 1997 年 3 月
・機関誌編集委員会委員　1991 年 8 月～
・機関誌編集委員会委員長　1998 年10月～
・心理学諸学会間連絡会委員
1984 年 9 月～ 1998 年 3 月
・公開シンポジウム
「普通学校で育つハンディ・キャップ児」（司会）
1979 年12月 1 日
「居住環境とストレス」（司会）1994 年 1 月29日
「現代社会と父親の発達」（企画）1998 年 1 月25日
・学会賞・奨励賞選考委員会委員　1998 年10月～
・日本応用心理学会名誉会員　2001 年 9 月

また，1992 年から 97 年までの間，海外学会誌（International Play Journal）の編集委員も引き受けておられました。このことは，先生の海外での研究活動及びその研究業績の高い評価を裏付けるものと申せます。さらに，1998 年開催の第 9 回日本発達心理学会大会（日本女子大学）では，大会準備委員長として運営全般を統括され，この大会を成功裏に終了させた功績も大きいものでした。

先生は学生たちの心の問題にも関心をもたれ，学生相談やカウンセリングに関わってこられました。1961 年から 87 年まで慶応義塾大学学生相談室で非常勤カウンセラーとして活躍され，1990 年から 91 年まで日本女子大学カウンセリングセンターの主事を兼任され，その運営に携わると共に，来訪する学生の心の悩みを真摯に受け止め，適切な助言，指針を与えておられました。

以上のように高橋先生は，先生の年代としては男性に比して女性の研究者はまだ少ない日本の中で，女性心理学者のパイオニアの一人として，大学，学会，社会において活躍され，多くの後継者，中でも女性研究者を育てて来られました。先生の教え子福田きよみさんが先生のお葬儀の弔辞の中で「……どんなに体調が悪くても，傍らに本を置き勉強をなさっている先生の研究に対する真摯なお姿に心を打たれ，がんばろうという気持ちを新たに帰ってくるのでした。……研究も，面白くなくてはね。子どものビデオをおこす作業，皆さんが大変っておっしゃるけれど，面白くて仕方ないのよ。子どもって本当に面白い。と目を輝かせていらした姿は，私たちの心の中で決して消えることはありません。……」と，先生から得た研究者としてのお教えを述懐しておられました。

私は，研究そのものを高橋先生とご一緒に進めたことはございませんでしたが，同じ大学に所属し，大学の運営を始め学会の開催や委員会の役員などにおきまして，ご一緒に仕事をする機会を何回かもちました。高橋先生は，歯に衣を着せず思った通りに表現される方で，かつその通り行動されました。したがって，私のような単純な人間にとりましては，先生のお考えははっきりして分かり易く思われましたが，先生のイメージの中で構成されたメンタル・マップの実現のためにご自身の主張を貫かれる時には，側近の方たちは戸惑うこともあったようでした。しかし，そうした先生の率直かつ実践的な行動力のおかげで，研究面でも生活面でも多くの成果を挙げられたのであり，先生のその行動力に，私は温かい賛辞を惜しみなく捧げたいと思うのでございます。

高橋たまき先生！　先生の大学を始め学会への数々のご貢献，本当に有り難うございました。どうぞ安らかにお眠りくださいませ。

（2002 年 5 月 12 日記）

高橋たまき先生の経歴等につきましては，日本女子大学人間社会学部心理学科の本間道子教授から情報をいただきました。記して謝意を表します。